

# 教育 を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

本書は河合隼雄、梅原猛ら9名のその道のオーソリティによる小学生相手の講演記録である。しかし、それぞれが語る内容は、その人の専門分野ばかりとは限らず「えっ、この人はこんなことに興味を持っていたのか」と驚かされる意外性が面白い。

例えば東京大学名誉教授で、人類学者である尾本恵市の講演は「自然に学ぶ」というテーマである。しかし専門の人類学はそっちのけで、夢中で「チョウ」について語る。チョウの標本「アウトクラトル」「マルコポーロモンキチョウ」などを生徒に見せて、本人がうっとりしている。「一週間かけてアフガニスタンの山の中へ馬で行って、取ってきたんだぞ。雌雄のペアだと10万円もするんだぞ。僕は売らないけど」

最後になってやっと人類学に近づく。サルの研究者はチンパンジーを「一匹二匹なんて数えませんよ。一人二人と数えます」なんていう。チンパンジーの人口はせいぜい一万匹いるかないかだが、人間は60億もいる(当時)。一種族でこんな数は珍しい。生きていくのにお金がかかるのは、人類だけだとも言う。このあたりはなん



◀『小学生に授業』  
河合隼雄・梅原猛編著  
朝日文庫  
定価 本体700円+税

だか考えさせられる。

京都大学名誉教授の山田慶児<sup>けいじ</sup>は「時を計る」と題して時計について語る。そもそも計るとは如何なる行為か。目に見えるものを計る場合、例えば長さならばかりがある。長さならば物差しがある。量ならば枴や計量カップなどである。それならば目に見えないもの、例えば時間や温度はどうか。いまなら時計や温度計がある。それなら昔の人はどうしていたか。ここでは時間の計り方の歴史が述べられる。

時間のなかでも比較的長い物は天体の運動で計る。一年は春分秋分で、一月は月の満ち欠けで、一日は日の出、日の入りで。それならば日常生活に必要な、もっと短い区切りの時間をむかしの人はどう計ったか。

まず頭に浮かぶのが日時計である。しかしこれは夜は使えない。そこで登場するのがロウソク時計。ロウソクに目盛りをつけておいて、火をつけて溶けて短くなっていく長さで時間を計る。

それから香の時計である。蚊取り線香のようなものを香で作って、火をつけて減少具合で時を計る。そして水時計である。桶に水を張る。桶の底の方に穴をあけ、水滴が落ちるようにする。桶の水面に舟を浮かべる。舟にはマストの棒が立っていて、それに目盛りが刻んである。水面が下がるにつれて桶の縁から見たマストの目盛りは変化していき、時の経過を表す。

その昔、中国の皇帝が馬車に乗ってどこかへ行くときに、その行列の馬車の中に、移動式水時計が据えつけてあったそうだ。

そうか、昔から人間は時間を気にして縛られながら、生きてきたのだ。遅刻、早退、残業、夜遊び、みんな「時を計る」のせいだ。

本書にはこのほか、梅原猛「学問の楽しさ」、山折哲雄「宮沢賢治」、河合隼雄「道徳」、井波律子「三国志」、芳賀徹「俳句」、木村汎<sup>ひろし</sup>「交渉」、安田喜憲「地中の花粉」が掲載されている。いずれも面白い。